


### 特別展評価シート(1/3)

施設名	東洋陶磁美術館	展覧会名	特別展「ルーシー・リー展」
-----	---------	------	---------------

概要・実績	目的	<p>本展はルーシー・リーの没後最大の回顧展として、初期から晩年までの作品を紹介しルーシー・リーの業績をまとめるものである。</p> <p>ルーシー・リーの制作活動には中国陶磁の影響や、朝鮮の白磁壺を譲り受けたバーナード・リーチとの長年の交流が大きな役割を果たしており、東洋と西洋を結び現代的な感覚の陶磁器を作り出した作家を取り上げることは当館にとって重要な意義を持つものである。本展の開催では、当館の現代陶芸の研究成果をもとに現代的な陶磁器や西洋陶磁を鑑賞したいという市民のニーズに応えて東洋陶磁美術館への新しい来館者を呼びこむことを目的とした。</p>				
	会期	平成22年12月11日～平成23年2月13日		会期 51日間		
	主催	大阪市立東洋陶磁美術館、日本経済新聞社				
	企画・後援	東京国立近代美術館・ブリティッシュ・カウンシル				
	協力・助成	日本航空・大和日英基金				
	観覧料	一般900円・高大生540円	無料対象者	中学生以下、および市内在住65歳以上等		
	観覧者総数	56,634人	有料入場	46,576人	(82.2%)	
	作品件数	234件	うち、借用	234件		
	関連事業	<ul style="list-style-type: none"> <li>・《関連》第18回アフタヌーンレクチャー（1回）、記念講演会（1回）</li> <li>・《連携》ワークショップ（のべ9回）、小鼓コンサート（1回）、光のルネサンス照明パフォーマンス（1回）</li> </ul>				
	企画・実施	<ul style="list-style-type: none"> <li>・（学芸課）出川哲朗、樋口とも子</li> <li>・ 東京国立近代美術館・工芸館</li> </ul>				
成果	<p>過去の同作家の展示経験と実績を活かし、来館者の満足度の高い展示と付帯行事を行うことができた。また作品性を活かした効果的なデザインによる広報物の作成と、これまで地道に築いた理解あるメディアとの連携によって、展覧会の内容を重視した効果的な広報活動を展開できた。これらが来館者増につながり、目標としていた若い世代や女性層といった新規来館者層を開拓することができた。またアンケート調査を毎日行うことで、展示造作や展示方法などについては来館者の要望に迅速に対応することができた。</p>					
補足事項						

特別展評価シート(2/3)

施設名	東洋陶磁美術館	展覧会名	特別展「ルーシー・リー展」
-----	---------	------	---------------

定量			入場者数	予算	外部資金	総事業費	観覧料収入	その他収入	収入合計	図録販売数
	目標	16,850人	15,818千円	—	15,818千円	13,838千円	1,500千円	15,338千円	3,000	
実績	56,634人	15,634千円	—	15,634千円	38,264千円	5,516千円	43,780千円	9,444		
達成率	336.1%	98.8%	—	98.8%	276.5%	367.8%	285.4%	314.8%		
定性	実績・伝統の継承と新たな魅力創出	評価点	<p>・美術館が関与する度合いが少ない巡回点も珍しくない中、とりあげた作家についての調査研究の蓄積や展覧会の開催実績を活かし、展覧会の企画運営を主導するなど、巡回展に主体的・中心的に参画したことを高く評価する。</p> <p>・安宅コレクションを中心に数多くの優品を保管・展示する美術館であることに安住することなく、新しい作家を発見し、陶磁器の魅力を新しい視点で紹介する展覧会に意欲的に取り組む姿勢を評価する。本展覧会では、若い層、女性層の心をつかむ企画と仕掛けの設定に成功し、観客の層を大きく広げることができた。館蔵品の伝統的な作品と現代作家による作品の双方を見てもらうことで、東洋陶磁美術館でしか経験できない美の空間を創出した。</p>							
		改善点	<p>・予想を超えた観客の入場があったことから、展示場がかなり混み合い、鑑賞条件の低下が見られたことは否めない。施設面の制約を、運営面の工夫でどこまで補うことができるかについて検討し、順次対応策を実施していくことが必要である。検討に当たっては、大阪市博物館協会が所管する各館がもっている大型企画展の情報・ノウハウを十分活用することを期待したい。</p> <p>・今回の展覧会の来館者にはアンケート調査を依頼し、膨大なデータが回収され、美術館でも既に分析を行っている。収集されたデータを、展覧会の企画その他の館の運営改善のためのデータ（経営情報）としてどのように活かしていけるかは、美術館の更なる飛躍にとって重要な課題である。</p>							
評価	さまざまな来館者への対応	評価点	<p>・リピーター層だけではなく、新規の来館者、とりわけ若い層、女性層を確保できたことを評価する。展覧会の企画・運営者にベテランと若手、男性と女性が配置されたことにより、若い女性の心を掴む斬新な試みが行われた。団塊の世代などの高齢者層をターゲットにすることに力を置きがちな博物館界にとって、人々が求めているコンテンツを提供すれば若い層も足を運ぶことを再認識させた。館のホームページによる幅広い情報発信とターゲットを絞った専門雑誌での情報発信、展覧会と館のイメージを体現したデザイン性のあるポスターなどの広報戦略も巧みであった。</p> <p>・目標を大幅に超える多数の入館者を確保するとともに、有料入館者数が極めて高い展覧会になったことを評価する。また、図録の購入率も極めて高かった。高額な料金の展覧会が多い中、入館料を千円に設定し、更に割引制度を導入したこと、開館時間の延長（夜間開館、月曜開館）などの攻めの姿勢とおしゃれ感覚に富む図録の制作が成功要因と言える。</p>							
		改善点	<p>・今回の展覧会は、観客のニーズを掘り起こす企画の開発、広報戦略、観客の満足度を高める方策、混雑対応等多くの点で、館の運営を更に向上させるための情報を得ることができたように思う。本展覧会から学んだことを今後の展覧会にそのまま適用しても、うまくいく訳ではない。学んだことを十分整理・分析し、館員の全てが共有する経験、館の知識資産として活用・応用可能なものに転換していくことが課題である。</p> <p>・今回の展覧会では、記念講演会の他に、アフタヌーンレクチャーや団体レクチャーが行われることにより、展覧会の予告機能やコアな観客層に密度の高い情報を提供できた。今回の展覧会で初めて美術館を訪問した多くの観客に、陶磁器の魅力を知る機会をどのように提供すれば、リピーターになってもらえるかを検討してほしい。</p>							

### 特別展評価シート(3/3)

定  性	評価点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・共催展、巡回展ということで多くの機関（マスコミ、美術館、その他）がかかわる中で、自主企画展と同じように館の主体性を発揮しながら、共催展として他の機関との連携・協力を図ったことを評価する。</li> </ul>
	改善点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・東洋陶磁美術館のある中之島地区は、国際美術館、市立図書館や中央公会堂などの文化施設の集積地区である。集積のメリットが十分活かされているとは言い難い。陶磁器ファンにはよく知られているとはいえ、東洋陶磁美術館の認知度はまだ十分とは言えない。認知度を高めるためには、東京都・丸の内地区が実施しているように、中之島地区の企業や官公庁、更に民間団体、大学等とも連携したアートプロジェクトを実施し、存在感をアピールすることも考えられる。東洋陶磁美術館は関西の誇りであることを、政官界や財界に更にアピールしていくことも必要である。</li> </ul>
評  価	評価点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・観客のニーズを把握し、可能な限り応えていこうとする意気込みは、アンケート収集の姿勢にも現れていた。入館者数の10%を超える者からアンケートを回収し、整理した努力を評価する。また、展覧会期間中にも、観客の要望に随時対応していこうとする姿勢が見られた。</li> </ul>
	改善点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アンケートにもあるように観客は、東洋陶磁美術館に様々なもの、高度なものを求めている。展示活動だけでなく、チケットの販売から施設の清潔さ、ミュージアムショップ等での接客態度まで広範囲に及ぶ。展示品のグレードが高い美術館には、展示品以外の面でも高いものが要求される。展覧会期間中に実現できなかったものについては、速やかに取り組んでほしい。</li> <li>・多くの入館者数を迎えた時の対応は、一朝一夕でできるものではない。今回の経験を十分総括し、観客の視点に立って、館内での居心地のよさの向上、鑑賞環境の向上に努めてほしい。</li> </ul>

総  評	評 価 点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大都会の一角の水辺にある美術館で、個性的な生き方をした作者の制作した陶磁器に美を感じ、非日常的な時間を過ごす経験を多くの人々に提供したこと、この経験をブログ等で多くの方々が交換し、情報の効果から生じたエネルギーによって、多くの人が訪問したことのない美術館に足を運んだ。このような今回の展覧会は、大都市にある個性的な美術館の在り方、方向性を示した。</li> </ul>
	改 善 点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・優れた館蔵品を駆使し、今回の企画展で培ったノウハウを活かし、更に、今回の展覧会の反省点を改善していくことにより、東洋陶磁美術館では、今回の企画展で得たものと同様の効果を恒常的に生むことが可能と思われる。陶磁器の魅力を多くの人に伝えるための調査研究活動とその成果を基礎に、更にストーリー性のある展示を行うことを期待する。また、若い層が陶磁器の魅力を知るための機会を充実してほしい。</li> </ul>